

## ロシア連邦とチェチェン紛争

中山 弘 正

(国際平和研究所所員)

はじめに

ロシア連邦のチェチェンで起っている激しく悲惨な戦争のことは、ここ数年でかなり広く知られてきていたが、2002年10月23 - 26日のモスクワ市内の劇場占拠事件で一挙に大きな国際問題となったといえよう。チェチェンでの戦争は、アメリカが積極的に進めてきた対イラク戦争準備ともからみながら、国際的な報道の舞台に一気に登場したのである。

本稿はこの劇場占拠事件とその後を一つの焦点としつつ、近年の歴史的経過を跡づけ、チェチェンでの出来事について考えようとするものである。しかし、そこでの戦争を、タイトルでは紛争としているのは、チェチェンの場合は、ソ連邦崩壊(1991年)の時に、独立して国家主権をもつことになった旧連邦構成の15共和国の場合とは異なり、その時には、或いはそれまでは、とにもかくにもロシア連邦 当時、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国 の中に組み込まれた自治共和国であったという事情に注意を喚起するためでもある。その事情自体がむろん問題なのであるが、「何故、チェチェンはその時(1991年)、アルメニアやアゼルバイジャン、グルジアのように独立できなかったのか」という一般的疑問への回答なのである。

### 1 拙稿「ロシア軍民転換と地域主権」(1994)のこと

ソ連邦の崩壊という出来事は、直接的には連邦構成共和諸国がそれぞれ完全な主権国家として分離独立したことを指しているが、<sup>(1)</sup> むろんその背景には様々の要因が複雑にからまっている。すなわち、「民族問題」などと並んで、「経済改革」という課題があったわけであるが、これにも中央集権指令型の計画経済という方式を市場メカニズムを中心としたものにしていくべきだという「システム転換問題」とともに、計画経済の下で軍・軍産複合体が余りにも巨大な力を持ち、民需品が圧迫されすぎているのが耐えられない、という「生産・需要構造の問題」が不可分からんでいたのである。<sup>(2)</sup> むろん、この2つの問題は簡単に切り離せるわけではない。改革派の論客の1人が、「目下、国は、本質において軍隊と軍事生産の屑で生きているようなものであるが、もはやこれからはそれではやっていけない。もう沢山だ、この重荷をとり除かなければ死である。……」<sup>(3)</sup> と叫んだときに、それは、一般民需生産への渴望であるとともに、それまでの産業構造を可能にし支えてきた集権計画システムの否定でもあった。

それは、一言でいえば、軍需産業の民需転換、コンヴェルシヤ(コンバージョン)であった。ソ連邦が解体する中で、すでにペレストロイカ期から叫ばれていたコンヴェルシヤのスローガンは、

軍需産業がとりわけ集中していたウラル地域などでは熱心に掲げられたのである。中央集権の強い計画経済体制の中で、モスクワ官僚たちが握っていた意思決定権限の地方への奪還ということも経済改革・市場移行の主張には含まれていたため、それは、地域・地方の自主性の強調となる。

ウラル地域で、「ウラル共和国宣言」が出された1993年7月1日は、そのような意味での「地方の叛乱」の時代であった。日本の約6.1倍にも及ぶ面積の旧行政区が合併し、人口2,355万人の「共和国」が宣言されたのである。1のタイトルの拙稿は、ちょうどその少し後、ウラルのバシコルトスタン共和国の軍民転換の現地調査をした著者のまとめた論文なのである。<sup>(4)</sup>

チェチェン紛争で、後に第1次チェチェン戦争といわれるロシア連邦軍・内務省軍の軍事介入が行われた頃のロシアの状況はまさにこの「ウラル共和国宣言」が象徴的に示しているといわねばならない。タタール人も、「タタルスタン共和国」に拠って、一時強硬に1992年3月31日の条約によるロシア連邦入りを拒否していた。その頃のある新聞の漫画に「スヴェルニテート（主権）」という旗をかかげた一人の農民が自分の小さな土地の上に足をふんばって立っている、というものがあった。どこでもここでも「主権」要求が相次いでいることを皮肉ったものであるが、ソ連邦崩壊後、ロシアがどこまで解体していくのかは、もしも放置されれば予断を許さない状況であったといっても過言ではないであろう。軍事介入の少し詳しい経過は次に見るとして、そうした各地域・民族の自立化を阻止し、ロシア連邦じたいの解体の流れに歯止めをかけること、そこにエリツィン政権の1994年12月の軍事介入の大きな狙いがあったであろう。そして、チェチェンの首都グロズヌイがたちまち空爆で廃虚と化したりしたことは、じっさい「ウラル共和国」をはじめ、各地の主権要求者たちを震撼させたのである。<sup>(5)</sup> チェチェンへの

軍事介入は、明らかに全国各地のさまざまな「主権」要求者たちへの連邦中央政府の「見せしめ」だったのである。その中央政府じたいが、議会派の立てこもるホワイトハウスを砲撃する（1993年10月）というほど政権基盤は弱いものであったし、一方のチェチェンは、多くの主権要求者たちと比較しても、ひときわ歴史的に根づかいロシアとの葛藤をもっていたので、両者がチェチェンで激突したことには、避けがたい何か力が働いていたのであろう。

## 2 歴史と経過

歴史 例えば或るロシア人の編集した『ロシアとチェチェン』<sup>(6)</sup>があるが、そのサブタイトルは「200年戦争」となっている。いやいや、200年どころではない、300年だ、いや436年だとチェチェン側発言ほど長いのが普通である。いずれにしろ、18 - 19世紀のロシア帝国のコーカサス地方への膨張の中で、いわば先住民族たりしチェチェン民族がロシア帝国への編入に抵抗するという戦争であるから、本質的には、わが国の「アイヌ人」問題、アメリカの「インディアン」問題と同じ質であると先ず考えられる。

とくに19世紀半ば、カフカース戦争（1834 - 59）として知られている激突は、先住民族（主としてイスラム教徒）のイママト（最高指導者）に選ばれたシャミールを中心とした回教法典国家イママトを作る運動として、ロシア帝国軍と衝突したので、4半世紀にも及び、また、組織的なものでもあったであろう。この戦争には、若き日の文豪トルストイも従軍して『コーカサスの虜』という作品を残しており、むしろそれによって（ほとんどそれのみによって）筆者などもカフカース戦争を思うのであった。文豪自身の従軍体験をもととし、現地の娘の好意によって捕われの身から脱するというこの作品は、その底に流れる「人間皆兄弟」という思想によって、後に述べるプリスターフキ

ンの作品にも大きな影響を与えたにちがいない。

さて、ロシア帝政を「諸民族の牢獄」と喝破したポリシェヴィキ政権は民族独立を政策に掲げていたとはいえ、一方で、中央集権的な国家形成を進めていくので、民族問題の対応は困難をきわめたといわねばならない。<sup>(7)</sup> ここチェチェンに於ても、ポリ党はその完全独立を認めたりするどころか、赤軍がイスラム系のスーフイズム教団を弾圧したことは知られているし、スターリン主導の農業集団化が全国で強行される中で、これに抵抗したクンタ・ハジ教団が抑圧されたことなどが知られている。<sup>(8)</sup>

しかし、スターリン体制が固まる中で、1934年チェチェン・イングーシ自治州が認められ、1936年には、自治共和国に昇格していたのである。1939年には人口約37万人弱とされていた。ところが、独ソ戦での対独協力を恐れて強制移住させられたクリミア・タタール [逆に、極東からは、対日協力を恐れられて、朝鮮民族] などと同様に、チェチェン人も、1944年2月、約40万人が (20万人は1日で、という) カザフスタン、中央アジアなどに「強制移住」させられたのである。無論、自治共和国じたいが解消・抹殺されてしまう、という驚くべき出来事が起ったのである。

プリスターフキン『コーカサスの金色の雲』は小説ではあるが、著者が、モスクワの孤児院の集団疎開で、コーカサスの、このチェチェン人たちの強制移住の跡地に住むことになってしまったことから生じる悲劇を描いていくのである。少年たちがそこへ入植する少し前のところで、貨車に「満載」されてしまって、ヒー (水) を求めるチェチェン人たちと出会う場面が忘れがたい印象を与えるのである。

ソビエト政権下でのこうした悲劇は、第2次大戦が終了 (対独1945. 5) してもすぐに解消したわけではない。チェチェン・イングーシ自治共和国が「名誉回復」し、強制移住させられた人々が

帰還 (その実、政府は列車も用意せず、徒歩で帰らざるを得なかったという) を許されたのは、スターリン批判 (1956. 2) 後も、1957年9月のこととされている。フルシチョフが書記長の時であった。<sup>(9)</sup>

その後は、先ず先ず、ソ連邦の中に納まり、その一地方として生きてきていた。ソ連邦末期の人口統計で約73万人 (首都グローズヌイ約40万人) とされているが、この23~24%はロシア人という。首都の人口は記録のある最後は18.6万人まで激減していくのである。

(i) 1996年8月

こうした歴史 (略史であったが) をたどってきたチェチェンでは、ペレストロイカからソ連邦の解体が、後年の独立への熱情を一気にかきたてたという面がある。すでに、例えば、1988年には、バルト諸国では「人民戦線」が結成され、「共和国独立採算論」というユニークな理論的主張をもちつつ、自立性を強化していたし、<sup>(10)</sup> カフカス山脈の向う側では、アルメニアとアゼルバイジャンとが衝突して、それぞれ民族的結集を強めていたのである。

チェチェンでも、1990年9月には「チェチェン全民族会議」が結成され、10月には、ドゥダエフを大統領に選び、11月には独立宣言がなされ、これに押されて、旧ソビエト系の最高会議でも独立が打ち出される、といった経過があったとされている。<sup>(11)</sup>

独立宣言が、1990年11月の時点で出されていたという点が注目されるが、モスクワでの1991年8月19 - 22日のクーデタ事件の後、1991年11月1日に「主権国家宣言」も出されている。ソ連邦崩壊に先だつこと約2ヵ月であるが、この少し前 (9. 6) に、ソビエト系 (したがって共産党員が多かったであろう) の最高会議は廃止されているので、その宣言の主体はチェチェン全民族会議であろう。反ドゥダエフ派 (共産党系で、ロシア人

も多かったであろう)とドゥダエフ派の内戦が続いていくが、エリツィン政府の介入もそれを直接の契機としている。

1994年12月11日、ロシア連邦国軍・内務省軍4万が、チェチェンに戦争をしかけた。<sup>(12)</sup>

首都グロズヌイがほとんど廃墟と化したほか、この戦争では、チェチェンの多くの村や町などがロシア軍に包囲され、非戦闘員・女子供・老人も多数死傷するというものであったことは、前掲注(8)の林 克明氏の、チェチェン側に身を置いた決死のルポルタージュで相当明らかである。

また、「大義なき戦い」に従軍させられた徴兵によるロシア兵士たちからは脱走も相次ぎ、すでにアフガン戦争のときからあった「ロシア兵士の母委員会」なども脱走を手助けするなど、ロシア側にも多くの問題があり、世論もエリツィンに批判的な声がかかなり高かったことが知られている。<sup>(13)</sup>しかし、すでに述べた如く、この軍事介入が、ロシア連邦内の各地の「主権共和国」派に与えた衝撃は大変大きく、そうした動きはその後、事実上ほとんど封じ込められていったといえよう。

悲惨な戦争がしばらく続くが、エリツィン政権も大統領再選を前に世論を無視することはできず、安全保障会議の議長レベジと、チェチェン軍の参謀総長(のち大統領)マスハドフとの間で、和平条約が締結されたのが、1996年8月のことである。締結地の名前をとって、ハサブユルト合意といわれるが、相方の死者は10万人ともいわれ、きわめて激しい戦争であった。

林 克明氏の決死的取材による本[注(8)]は、1997年5月に出版され、チェチェン独立運動始末、とサブタイトルがある。明らかに、以上の第1次独立戦争での「一段落」という著者の気持が感じられる。悲惨な戦争の現場にかなりの期間身を置いておられたので、ハサブユルト合意は確かに一つの区切りでほっとされたことでもあろう。

しかし、ハサブユルト合意は、肝心の国家主権

問題をただ「5年間棚上げ」にただけだったのであり、じっさいは第2次戦争までの3年間に政治的解決へ向っての相互の歩み寄りといったものは、ほとんど全くなされなかったのである。

いやむしろ、この和平の数年間こそ、イスラム過激派がチェチェンに滲透し、次の戦争への準備がされていたのだ、のちに2001年10月の米英軍介入のアフガン戦争で問題になるアルカイダとも、この時期に強い関係ができたのだ、という見方が次第に強まっていくことになる。

ともあれ、たしかに、ハサブユルト合意後、チェチェンについての一般の関心は下り、また情報も急減していったのは事実であろう。

(ii) 1999年9月

しかし、それから3年ほどした1999年、モスクワ市内のマネージナヤ広場の新商店街をはじめ、巨大なアパート型の一般住宅が、地下室に仕掛けられた爆薬などで一気に吹きとばされる、といったいわゆる連続住宅爆破事件が発生した。モスクワだけではなく、ロシア南部でも、また北のサンクト・ペテルブルクでも、関連性が強いと思われる爆破事件が続いたのである。

筆者自身も、この9月モスクワ入りしたとたんに本当に連日の爆破ニュースだったので、近隣の人々の不安も身近に感じたものである。ロシア政府はこれをただちにチェチェンゲリラの仕業であると断定し、グロズヌイ空港をさっそく空爆する、といった拳に出たのであった。こうして、第2次チェチェン戦争が始まったのである。

首相は、1999年5月にプリマコフが突然解任されたあと、ごく短いステパーシン期を経て、8月半ばプーチンが就任していた。そして、2000年の3月の大統領選を目ざして、エリツィン＝プーチン派と、モスクワ市長ルシコフ＝プリマコフ元首相連合とは競い合っていたのである。そのため、モスクワ市などでの連続住宅爆破事件は、前者が後者を陥れるための[少くとも、モスクワ市長の

権威には大傷がついた] 謀略説が巷ではささやかれていたのも不思議ではない。

外国人の一時滞在であるから判断材料に欠けるとはいえ、この謀略説は、当時の筆者としては、全く無根拠と思えなくもなかったのである。というのは、先ず、チェチェンゲリラとされるものが、大きな集合住宅を一挙に吹きとばすほどの爆薬を上手に使うほどの組織力があるのかどうか少し疑問であった。さらに、ちょうど、大統領選挙に関係して、ある集会でルシコフ市長が、「自分は出馬しない、といったら出馬はしないのだ」と弁明する場面が放映されたりしたが（彼は何度もその口にしており、彼がそういえばいほど一部の人は逆の意味にとっているともいわれたが、それはともかく）、その時の様子から、ルシコフ自身はこの一連の事件を自分に向けられた謀略だと思っているのではないかと直感的に思ったのである。いずれも、根拠は不十分であり、真相はむろん今にいたるもわからない。ただ、結果的には、これをチェチェン攻撃の契機とし、その激しく非情な攻勢によって、プーチン首相の人気は大いに高まり、彼は、1999年12月31日のエリツィン大統領辞任のあと、大統領臨時代行となり、やがて2000年3月の選挙を経て、5月7日大統領になった。

1999年9月の連続住宅爆破の頃には、黒髪でチェチェン人と似ているとして長い時間職務質問された日本人がいたりしたが、全般に過剰警備、過剰手続きとなり、それに対して新聞などでも厳しい抗議の声があげられていた。チェチェン人=チェチェンゲリラの疑い、拘束、といったことが各所で平気で行われているように思われ、その面も恐ろしさを感じたのは事実である。

いずれにしる、プーチン大統領の人気上昇は、第2次チェチェン戦争の遂行に比例していたのである。

(iii) 2001年「9. 11」

筆者は、2001年「9. 11」事件をモスクワ市内

のホテルで知り強い衝撃を受けた。プーチン大統領は間髪を入れずに自らテレビに登場し、プッシュ大統領に追悼の意志表示をするともに、国際テロリズムとの闘いをともにすることを誓う。その後のクレムリンの諸論調も含めると、モスクワ執行府が、アメリカと共に「イスラム過激派」という共通の敵をもっているという認識とアピールが強められていく。

それまで、西側から「民族浄化」の悪政として弾劾されることが多かったチェチェン紛争について、プーチン大統領らとしては、それがイスラム過激派の国際テロリズムの一環であると強調することによって自己正当化を強めようとしたわけであろう。

この大事件から1ヵ月後、10月8日に米英軍によるアフガン空爆が開始されるが、このアフガン戦争にあたって、ロシアは米英軍がかつてのソ連邦、今でもロシア連邦の前庭のような中央アジアに軍事拠点を設定することを黙認し、自らも北部同盟の支援によって、アルカイダ政権の追い落としに積極的にかかわったのであった。

先に述べたハサブユルト合意（1996. 8）以後、1999年9月の連続住宅爆破までの3年間にも、チェチェンゲリラの数100人がアフガンでアルカイダの下で訓練を受けていたのであるとか、その逆の動きとかいった情報は、じつは筆者などもこの「9. 11」以後はじめて知ることになったのである。むろん、こうした情報の真偽のほどは全く不明であり、今もってその真相はわからない。しかし、こうした情報が、1999年9月の連続住宅爆破なども、クレムリン自作自演の謀略ではなく、ひょっとしたら、イスラム過激派がそれぐらいの軍事行動力をもっていたのかもしれない、と思わせるようなものであったことも事実である。

むろん、仮りにそうだったとしても、そこまでせざるを得ないほどにチェチェン戦争の中で彼らの対ロシア復讐心が高まっていた背景というもの



があるうし、ふだん先住民族の声が直接は何も聞こえてこないというもどかしさが残るのである。

ともかく、この「9. 11」は、ロシア執行府が、チェチェン戦争は、少数民族弾圧の民族浄化策などではなくて、「9. 11」の実行の部隊であったとされるイスラム過激派とのチェチェンという場における闘いであるというふうにアメリカをはじめ西側諸国に訴える好機ともされたように思われる。そして、この方向性は、その後も一層強められていき、2002年10月のモスクワの劇場占拠事件で、さらに調子が高められていくのである。だが、その前に、占拠事件の少し前に、モスクワに滞在していた筆者の報告を記録しておこう。

(iv) 2002年9月

1996年、1999年、2001年と不思議にチェチェン戦争がらみの時期にモスクワ滞在が重なっていた筆者は、2002年9月2 - 14日にもそこに居た。

その間、チェチェン戦争がらみの報道は決して少なくなかったが、一番問題とされていたのは、ロシアの対グルジア（シュワルナゼ大統領）関係の緊張、であった。それは、ロシア側の「掃討作戦」を避けて、隣接のグルジアへの国境を越えてパンキシ溪谷に立てこもるチェチェン軍が居るのでそれを許すなというロシア側の要求が、グルジアになかなかその通りには受け入れられず、ならばロシアはグルジアそのものとの戦争も辞さないという高姿勢に出た、という問題である。直接には、8月19日グロズヌイ近郊でロシア軍大型ヘリが撃墜され、110名ぐらいものロシア人死者が出たことが契機であった。<sup>(14)</sup>

そして大事なことは、この後もずっとそうであるが、プッシュ大統領が対イラク戦争を準備し、国際世論をそのことに動員していこうと熱心になっていることと、このロシアの「対テロ戦争」とが調子を合わせていく、ということである。この頃のモスクワのある新聞の漫画に、プッシュ大統領がフセインの髪の毛をつかんで、ぶら下げて歩いて

てくる（フセインは、その程度の小さい姿として描かれている）、そのすぐ後からプーチン大統領が、同じようにシュワルナゼを髪の毛でぶら下げて歩調を合わせてついて来る、というものがあったが、この時期の米口政治界の雰囲気をつまみにとらえていると感じられた。後にもふれるが、事態を少し先どりしておく、劇場占拠事件のあと、ロシア・グルジア関係自体は一挙に好転し、両国は不戦を誓うことになる。<sup>(15)</sup>

2002年、モスクワでの「9. 11」1周年はさいわい特別な事件は起らなかった、各所の警戒は相当厳しかったようである。むしろ印象的だったのは、ソチに夏季休暇中だったプーチン大統領がさっそくにもプッシュ大統領に追悼のメッセージを電話している場面が、テレビ放映されたことである。<sup>(16)</sup> プーチンが、プッシュのいう国際テロリズムとの戦争に完全に賛同・協力し、チェチェン戦争もその一環に位置づけていることをあらためて世界にアピールしようとの意図は明白であろう。

2002年9月のモスクワで、以上のものよりも少し小さいが、大統領アスラン・マスハドフが2ヵ月以上も消息不明で、ただ6 - 8月頃のテープなるものが出廻っている、という報道があった。そもそも生きてるか死んでいるのか、というものである。<sup>(17)</sup> この情報も、10月下旬の劇場占拠事件のときに、急に占拠グループと彼との関係がとりざたされたことと何か関係がなくもなさそうであるが、これも真相はわからない。

ただ、マスハドフは一般には穏健派とされてきた人物で、ゲリラやテロの武闘路線とは一線を引いているといわれていた時期もあった。「対話」路線がモスクワでいわれるときの可能性のある窓口の一人であったと思われる。

この頃でも一方では、対話と交渉でチェチェンに平和をもたらすには、ボリス・ベレゾフスキーの名前が無関係ではありえないとか、<sup>(18)</sup> 元首相エヴゲニー・プリマコフはチェチェンの叛兵と

の話し合いを進めよといっているとか、<sup>(19)</sup> そうした情報もむろん流れていたのであるから、マスハドフの行方、という問題は全く政治性のないものでもなかったかもしれないのである。

2002年9月の筆者モスクワ滞在中のチェチェン戦争がらみのことで、チェチェン戦争に従軍した25歳のロシア青年と短時間ながら会った、という出来事がある。アルカジー・パフチェンコというその青年は、チェチェン戦争でのある場所の名前(アルハン・コルト)を題とした短い小説を2002年2月号の『ノーヴィ・ミール』誌に載せた人である。<sup>(20)</sup> 最初は徴兵の応召兵として従軍し、次に志願兵として従軍したという体験をもとにこの小説は描かれている。戦場での悲惨・不安・孤独、またそれなりのモスクワでの息苦しい生活からの解放感・自由、そして戦友愛などがクールなタッチで描かれるが、主人公は最後は現地の少女を殺してしまう。……

時に現政権への批判めいた表現もあるようなのであるが、面談して驚いたことには、チェチェン人に対して予想外に厳しい見方をしていることであつた。若いロシア人に普遍的な態度かどうかは分らない。しかし、ロシア人知識人の間でもそうした見方が強いと思われるので、<sup>(21)</sup> 事柄の深刻さを一層感じたのである。

2002年9月段階のこととして、最後に9月8日の兵士逃亡事件にふれておこう。ヴォルゴグラード市の郊外で演習中だった兵士たちが、将校(上官)が余りにもなぐるのに嫌気がさして、54人が隊列をなして離脱し、市にむけて昼夜行進し、当局に訴え出たのである。「将校が兵士をなぐるのはふつうのこと。この事件でふつうでないのは、54人(!)の兵士が隊列ごと離脱したということである。」<sup>(22)</sup>

どこの国の軍隊でもその内部で不当な暴力がふるわれることは、戦前の日本での野間宏『真空地帯』を掲げるまでもなく、常識といえは常識であ

らう。しかし、こと現代のロシア軍に限ると、年間何百という兵士が戦地にもいかないのに軍に入ったばかりにいじめや暴力で命を落とすとされてきた。<sup>(23)</sup> このことは、現代のロシア軍隊の暴力性・質の低さをも示していると考えられ、それが外に向かえば、チェチェンなどでの非戦闘員へのおぞましい暴力に化する。とともに、内に向っては、徴兵制が未だ残されている(というより平の兵士階級では未だ主要な部分をなす)がゆえに、全体的には少子化も進み両親の手厚い保護の下に大切に育てられてきた子供が、ただしばらく軍隊に入ったばかりに、理由もわからず死体となって帰ってくるという悲劇が生れるとみられた。それゆえに、チェチェン戦争は、徴兵制を廃止し、志願兵(契約兵コントラクトと略称されることが多い)制に切り換える、というエリツィン大統領期以来の、「ロシア兵制問題」とも密接に関係していたのである。じっさい、後で述べるように、劇場占拠事件の後でもこの兵制問題はすぐ浮上しているが、この9.8ヴォルゴグラード事件は、秋の徴兵を開始する日が近づいていただけに衝撃が大きかったのである。<sup>(24)</sup>

### 3 モスクワ劇場占拠事件とその後

モスクワは市内に環状地下鉄があるが、クレムリンから南東部の地下鉄駅(プロレタルスカヤ等)からほど遠くないメリニコフ通りの軸受け工場の文化宮殿(日本では文化宮殿劇場、単に劇場と報道)に「チェチェン戦争の終結・ロシア軍の即時撤兵」を求める武装勢力53人がミュージカル「北東」上演の幕間に突入、約800人以上の観客・劇団員等を人質に立てこもった。事件そのものは日本でも競って報道されたからその経過をここで詳しく追跡することは避ける。26日(土)の特殊ガス使用と特殊部隊突入とで終わったが、約820人の人質から120名前後も死者が出たとされるが(128人 11.9)、最終的なことは未だ判然としな

い。武装勢力は、チェチェン戦争で夫を失った女性ら18人も含む決死隊で、「自分たちは死にに来た」「チェチェンではもう10年も戦争をしているのに、あなたたちはのんびり劇を楽しんでいるのか」「自分の息子もまたゲリラになって闘う、と聞いてやめてほしいと思わない母親がいると思うのか」などの彼らの断片的発言が紹介されている。そして日本でもかなり大きくとり上げられたのは、使用された特殊ガスの問題であるが、それもここでは取り上げない。<sup>(25)</sup>

ペレストロイカ期から「改革派」が掲げるウィークリのひとつとされてきた『アガニョク (灯)』誌は第1報を載せた号では未だ占拠事件は始まったばかりであったようだが、あわただしく緊張に満ちたいくつかの写真とともに、「戦争がおこなわれている。それはモスクワにも来たのだ。……今日は未だ選択はなされていないが、たぶん、プーチンの生涯の中でももっとも難しい選択となろう。1999年より、また2001年9月11日よりもっとも難しい。何故なら、モスクワのあるいはニューヨークの爆破も未だわが国の首都での戦争ではなかったのだ。戦争は全ての者に及んで来た。各人にだ。が、誰も準備できていない。……」<sup>(26)</sup>と記した。

『グラスチ (権力)』誌も、「幕間のあとの占領」で、711人が切符を買っていたことから始めて写真を多数載せつつ、25日までの58人の釈放などを報じ、「死にに来た」といいつつもマスクをとらないのは、やはり交渉で何かを獲て生きて帰ろうとしているのではないかと論じた。<sup>(27)</sup>

穏健なビジネス誌『エキスペルト』も、「平和、それは戦争だ」として劇場の正面を外から固める兵士の写真などを載せ、独立というが、ハサブルトからの3年間でじっさいは国際テロリズムに彼らは加わった。……われわれの現在ではもはや平和ではないことをさとらねばならない。……もはや平和ではない。……ロシア市民も外国人も男も女もテロリストの人質であることを理解せねばな

らない。」<sup>(28)</sup>と、今や戦時、と訴えた。

突入・「解放」直後頃の『イズヴェスチヤ』紙の報道で見落せないものがある。ひとつは、全国世論研究センター(テ・イ・ザスラフスカヤ主宰)の緊急アンケート調査で、「チェチェンでの軍事行動を続けるべきか」「和平交渉を始めるべきか」の問いに対し、2002年9月の時点では、戦争継続34%、和平交渉57%、不明9%だったものが、この事件直後は逆転し、戦争46%、和平44%、不明10%と変わったということである。<sup>(29)</sup>

もうひとつは、真相は不明だが占拠戦士が外国とも通信していたということにも関連するが、筆者などが漠然と思っていたよりもはるかに多くの国々に「チェチェンの外交代表部」がすでに設立されて来ていた、という問題である。中には全くそうした実体をもたないのにロシア側が名指ししているというのものもあるようだが、イギリス、オランダ、ベルギー、ドイツ、チェコ、ポーランド、エストニア、リトアニア、ウクライナ、グルジア、トルコ、シリア、イラク、パキスタン、カタルム、アラブ首長国連邦、パキスタンなど18カ国にのぼるというのである。<sup>(30)</sup>これも真相不明だがトルコだけでチェチェン人難民が50万人にものぼる、という。ロシア政府は当然、そうした代表部を閉鎖すること等を各国政府に求めているので、各国とロシアとの緊張の種子となる。

事件から少しずつ時間が経過する中で、出てきている事柄をいくつか摘記しておこう。

- ・9月段階で、国家間の戦争の直前までもいっていたグルジアとの関係は、一気に好転し、両国ともテロリズムを共通の敵として、国境での作戦も共同でやっていくことで合意した。<sup>(31)</sup>
- ・外国人の再登録があらためて全国的に行なわれ、期限までにしない人々で、さっそくにも国外退去者があたりしている。<sup>(32)</sup>
- ・犠牲者に補償が出るのか、出てもひどく少ない



ので、生命はコペイカが [1コペイカ3 - 4円]、  
といった声が上がっている。<sup>(33)</sup>

- ・劇場のその後の経営が厳しい状況にある。建て物はモスクワ市が修理してくれるが、劇団員300人以上も養う必要があり、100万ドルの援助要請が文化省になされているが、すぐ出そうもない。<sup>(34)</sup>
- ・対イラク戦争を準備するブッシュ、ロシア大統領プーチンの距離は一層縮ったといえよう。ブッシュは『イズヴェスチヤ』のインタビューに答え、ロシア領内にもアルカイダは居るし、ビンラーデンはチェチェンにも関心がある、といった。<sup>(35)</sup>
- ・情報統制については思ったより批判が少ないが、そのことは以下に紹介する諸論調からあるていど推測がっこう。が、ゼロではない。<sup>(36)</sup>

こうした状況の中で「識者」たちの少しまとまった発言も散見する。

もともとエジプト経済の専門家であった元首相プリマコフは今回占拠劇場にも一度入っているが、「イスラムとの戦争」ということに絶対してはならぬので、あくまでそのファンダメンタリズムとエクストゥレミズム（原理主義と過激主義）とは峻別せねばならぬと強調する。これを見誤ると、ロシア連邦内の約2000万人のイスラムそのものとの戦争になり、国は分裂してしまうだろう。テロリズムの根はコーランにはない。コーランは自殺も禁じている。……と信念をのべている。<sup>(37)</sup>

アンドレイ・クラエフ（1984モスクワ大哲学卒、神学校へ、現在ロシア正教司祭でもある神学者）は、先ず、ソビエト期も含めロシアではそもそも、正義の武力による「権力奪取」は正当化されてきたことを問題とする。そして、イスラム世界もキリスト教世界以上に多様であることに注意を喚起している。が、テロリストに対しては、「ロシアそのもの」が闘うだろう、とのべる。<sup>(38)</sup>

以上は新聞であるが、『アガニョク』などでも、ソ連邦の崩壊で、ロシア人は自由を享受し、また個人主義・私生活第1主義になった傾向が強いが、やはりここで国家とかその力とかを考えなおさねばならない。ハサブユルト後の3年間のことも、結局チェチェンへのイスラム過激派の滲透、というのが実際のことだったと認めざるを得ないのではないかと示唆する論調が多いように感じられる。<sup>(39)</sup> そして、目下のチェチェンの行政上のポストが交替せざるを得ないだろうという意味で、彼はテロ行為の「最後の犠牲者である」、次のポストは実業界から出るのが望ましい、といった議論を早くも見かける。<sup>(40)</sup>

ところで、すでにふれたように [注 (22) (23) (24)]、チェチェン戦争とロシア兵制とは密接に関係していることが、この劇場占拠事件後にも明瞭に感じられる。

2002年11月4日に、国防相セルゲイ・イヴァーノフは、徴兵制の契約兵制への移行という長年の課題が近く採択されること、それは未だコンセプトで、具体化には6 - 8ヵ月かかること、移行しても現行の2年間よりは短い徴兵制も残すこと、などを述べた。<sup>(41)</sup> しばらくして、21日は2004年初頭から志願兵制へ切りかえられるが、この移行だけで300 - 400億ルーブルもかかること、現地を指揮する参謀本部は、2009 - 2011年頃までに切りかえができれば早い方だといって反対している。新兵の方がよく命令をきくというのである、と報じている。<sup>(42)</sup> その翌日には、2004 - 07年の間に12.6万の兵士を契約兵にする、という計画、と報じられているが、見出しは「契約兵の軍隊はすぐには現われないだろう」、<sup>(43)</sup> と早くも一歩後退の印象を与えている。

#### 4 プリスターフキン『コーカサスの金色の雲』のこと

チェチェン・ゲリラ部隊によるモスクワ劇場占拠事件(2002. 10. 23 - 26)は、以上見てきたように、ロシア人の世論を急激に硬化させ、イスラム過激派とチェチェン人一般とを峻別し、和平交渉を進めるべきだというプリマコフのような「良識」派の声を圧倒して、チェチェン人は過激派と一体であるから、ロシア人も自国の権力批判などしていないで一体となってこの「第3次チェチェン戦争」に勝たねばならぬという「民族」派が非常に強まるという結果をもたらしている。現地での「掃討」作戦が非情に推進されているようであるが、もはやその実情はほとんど一般の耳目からは隠されている。そこに展開するのは「民族浄化」であり、民族戦争であろう。

それでいいのか。

プリスターフキン(1931年生)は自分の体験を踏まえ、モスクワの孤児院から、強制移住させられたチェチェン人の跡地の村へ送り込まれた「クジミン兄弟」の身の上を物語る。瞑想的でアイディアのあるサーシカと実際のコーリカは、ここでも力を合わせてつらい、ひもじい生活を生き抜いていく。しかし、現地に残っていたチェチェンゲリラに自分たちの先生ばかりでなく、ついにサーシカを虐殺される。しかし、生残ったコーリカはチェチェン人の孤児アルフズールと出会い、2人はお互いの軍隊から相手を守りつつ、慰め合って生きのびる。<sup>(44)</sup>

「俺たちは兄弟じゃないか」というプリスターフキンの訴えは、トルストイの『コーカサスの虜』のロシア兵マジーリンと現地の娘ジーナとの愛と友情の物語とも重ってくる。

少し甘いかもしれない。しかし、ほとんどあらゆる情報がロシア語とロシア人の視角のみに基いている「チェチェン紛争」の根源を理解するには、チェチェン人自信の言語と視角と情報に依るもの

が必要であろう。バルカンとくに旧ユーゴスラヴィア連邦について、岩田昌征氏が主張してこられたことにも相通することである。<sup>(45)</sup> その点からも注(8)の林 克明氏の行動力・その本は注目に値する。

#### 注

- (1) バルト3国は別として、1991年12月8日のロシア、ウクライナ、ベラルーシの独立国家共同体設立は、他の共和国には「突然のこと」で、中央アジア5ヵ国も急ぎこれに加わり21日のアルマ・アタ宣言となった。木村英亮「ソ連の歴史をふりかえる」『歴史学研究』2002.11。拙著『ロシア 擬似資本主義の構造』岩波書店、1993. 44 - 47頁。
- (2) ユーリー・マリツェフ、イーゴリ・オレイニクとの共編著『ベレストロイカと経済改革』岩波書店、1990も、注(1)拙著とともに参照されたい。
- (3) 注(1)の拙著39 - 40頁。
- (4) 拙稿「ロシア軍民転換と地域主権 ウラルを中心に」明治学院大学『経済研究』第98号、1994. Nakayama, Hiromasa (1994), "Conversion and Regional Sovereignty in Russia: Concentrating in the Urals. PRIME, Occasional Papers Series 18.
- (5) 筆者の1993年夏のウラル調査に協力して下さったジャーナリストを1994年夏に日本に招聘したが、その後の便りで、現地での「主権」派の受けた衝撃の大きさを知った。
- (6) . . . . . 2000.
- (7) ポリ党とグルジア問題から入り、民族問題を研究した高橋清治氏の『民族問題とベレストロイカ』平凡社、1990。また、ソビエト史研究会編『旧ソ連の民族問題』木鐸社、1993 など山なす文献がある。

- (8) 林 克明『カフカスの小さな国 チェチェン独立運動始末』小学館、1997。そもそも内戦期(1918 - 20)にボリ党・赤軍に抵抗していたガツィンスキーが1921年捕まり、反ボリ勢力が下火になっていった。関連して校正段階で、『情況』2003. 1 - 2月号に長尾久論文があることに気がついた。
- (9) 筆者は、ソ連邦地図(中学7、8年用)を手許に置いているが、1954年発行のため、自治共和国名は見当らない。
- (10) 注(2)の拙著にやや詳しく紹介し、論じてある。また、拙著『ペレストロイカのなかに住んで』読売新聞社、1989。
- (11) 注(8)の林 克明氏に主に拠っている。ただ「独立宣言」の日付は、1990. 11. 2とか11. 16などある。
- (12) この1994年12月11日というタイミングについて、林 克明氏は欧米の共犯もあったとしている。ちょうど欧州安保協力会議がNATO東方拡大をめくり協議していたが、欧米口は協調できなかった。そこで、「民族自決」を削ったが、ロシアはその直後にチェチェンに侵攻したという。注(8)林、130頁。
- (13) 拙稿「チェチェン戦争とロシア軍制」『軍縮問題資料』234号、2000。
- (14) 『朝日新聞』2002. 8. 20、8. 21、8. 27など。  
(以下 と略) 2002. 8. 20は少くとも80人の死者と報じ、8. 21の詳報で114名死亡、33名救出、うち27負傷とした。8. 22のトラック上のロシア兵が手を振る写真を入れた「チェチェンでの作戦」という記事は、「外科手術は役に立たぬ。薬はない」とチェチェン問題の難しさを述べている。関連記事が雑誌のNo.33, 2002. 8. 27, No.34, 9. 2 - 8にある。  
ロシア・グルジア関係については、9. 9 - 15がシュワルナゼに厳しい論調だったほか、2002. 9. 5も一面で報じた。9. 13はモスクワがグルジアに「1ヵ月以内のテロリスト掃討」を要求しているとした。シュワルナゼもロシア参謀本部に賛成している。パンキシには少くとも1800人の戦闘員が居る。(9. 17)。ロシアはいつでもグルジアとの戦争を始められる(9. 20また、9. 27)。
- (15) 2002. 11. 19
- (16) 「プーチンは支援の再確認をブッシュに電話した。ロシア大統領は世界の指導者では最初である。」The Russian Journal, 2002. 9. 12.
- (17) , 2002. 9. 4.
- (18) , No.33. 2002. 8. 27 - 9. 2.
- (19) The Moscow Times, 2002. 9. 11. またこの頃の報道で、チェチェンの軍に原爆が渡っている可能性を示唆したものもあった。  
, 2002. 9. 20.
- (20) " " 2002. 2 その他16作品を収録したフロッピーを筆者は持っている。
- (21) 本稿の最後で述べるプリスターフキンなどは別として、一般にロシア人知識人もチェチェン人については厳しく、批判的な人が多い。ある方は、平地のチェチェン人と山岳のチェチェン人と分けて、前者とは平和的にやっていけるが、後者とは難しい、と筆者に語っていた。
- (22) , No.67, 2002. 9. 12 - 15.
- (23) 第1次チェチェン戦争時には、脱走兵は千のオーダーだといわれた、注(13)の拙稿。
- (24) ロシア連邦になってから、徴兵を避ける方法も増え、じっさい、ここ10年で4万人が(合法的に)逃れている、とか、或る世論調査では、職業軍(契約兵制)支持72%、半年の徴兵(今問題になっている)支持17%、で「現行のまま」は7%の支持しかないとかされるが(いずれも2002. 9. 25)、原則全員2年間という制度

- は一部の契約兵制化と併行し残っている。
- (25) いくつかのモスクワでのテレビ放送の内容等について、芦原サチ子明治学院大学講師から資料提供を受けた。記して感謝する。以下の本文では印刷物のメディアを主にとり上げる。
- (26) , 43. 2002. 10. .11.
- (27) , 42. 2002. 10. 28 - 11. 3  
また、同誌43. 2002.  
11. 4 - 10.
- (28) , 40. 2002. 10. 28.  
. その後の経過の整理 (同誌41, 2002.  
11. 4), チェチェン略史 (同誌42, 2002. 11.  
11) など。
- (29) 2002. 10. 31. .4.
- (30) 2002. 11. 1. .1. チェチェン人の国家は、「イテルキア共和国」と呼ばれている。ロシア政府はこのたびの事件の関係者の逮捕も要求するなどいろいろなごたごたが続いている。  
2002. 11. 20 他。
- (31) 2002. 11. 19.
- (32) 2002. 11. 13.
- (33) 2002. 11. 9. 12月3日、アンナ・リュビーモヴァ等は、国に対し100万ドルの補償請求の訴訟にふみきった。 2002. 12. 4.
- (34) 2002. 11. 14.
- (35) 2002. 11. 20. ツアールスコエセローのエカテリー宮殿での両大統領のことなど  
2002. 11. 23.
- (36) 44. 2002. 11. 11 - 17. など。
- (37) プリマコフ氏は、1960年代に日ソ経済学者の会 (大内力氏主宰) で来日、筆者もお世話のお手伝いをしたことがある。この論は 2002. 11. 5  
の第7面紙面一杯に展開。
- (38) 2002. 11. 13. 彼らの宗教は戦争だ。
- (39) 国家の無力化を論じ、力はどこにあるのか、というドミトリー・ブイコフ、テロリズムは今日ビジネスになっていて、以前とは全く違う指導者層がやっていると、グレフ・パヴロフスキー ( , 44, 2002. 11)。ハサブュルト後、アラブから武器を輸入ばかりしたチェチェン、それでも大多数は平穏な生活を望んでいる、ただ山岳部には、「独特の文化」があって、というセルゲイ・カラガーノフ (ヨーロッパ研究所)、  
45. 2002. 11. たしかに和平交渉論は今も多いが、1991 - 94、1996 - 99の2回のチェチェンの平和期に、じっさいは、非チェチェン所有のイチケリ化 (チェチェン国化) がされた。マクシム・ソコロフ 46, 2002.  
11.
- (40) , 45, 2002. 11. 18 - 24.  
のこと。
- (41) 2002. 11. 5. 劇場占拠事件から「第3次チェチェン戦争」が始ったとし、2003年の国防費約5,300億ルーブルの65%、3,450億は公開されるなどと述べた。
- (42) 2002. 11. 21.
- (43) 2002. 11. 22.
- (44) プリスターフキン 三浦みどり訳『コーカサスの金色の雲』群像社、1995。
- (45) 岩田昌征『ユーゴスラヴィア 多民族戦争の情報像』御茶の水書房、1999。
- [本稿は日本大学経済学部の公開講座 (11. 30) の骨子でもある。栖原 学氏に感謝する。]